

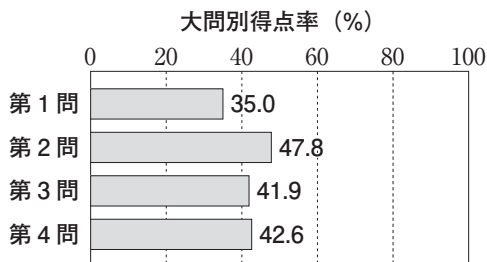
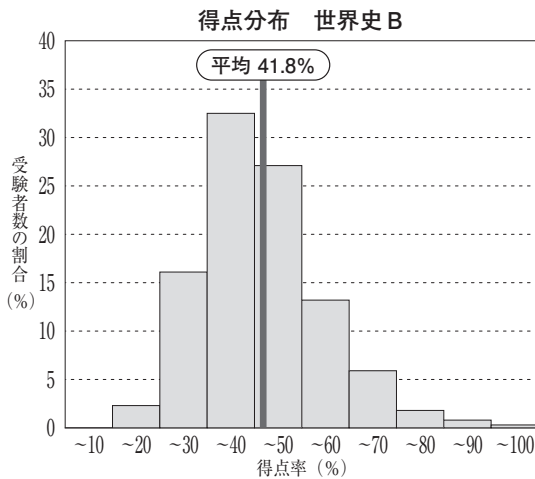
# 世界史B

毎日のニュースに関心を持ちながら、基礎固めをしていこう。

## I. 全体講評

今回は、例年通り既習の古代史の正答率が高く、未履修と思われる近現代史の正答率が低かった。しかし、正答率のベスト1は近現代史で、暗殺されたアメリカ大統領ケネディの問題（解答番号18）であった。これは、最近まで駐日大使であったキャロライン＝ケネディ氏が父であるケネディ大統領の紹介とともによくニュースに取り上げられた結果と考えられる。毎日のニュースは歴史と結びついている。関心を持って見聞きしよう。

また、ベスト2も近現代史の日本の米騒動の問題（解答番号22）であった。中学の歴史分野で学ぶ内容が記憶に残っていた結果であろう。中学時点での日本史・地理は、世界史受験の前提となる。世界の国々・地形・都市等の場所は、正確に覚えておこう。



## II. 大問別分析

### 第1問 世界史上の君主や王朝

世界史上の人物の事績を押さえよう。

得点率が30%台と大問4問のうちで最も低かった。この原因は、ワースト2から5までの問題がここに集中したためである。ワースト2の正答率19.9%の、イギリスの委任統治領になったイラクを問う問題（問9）は、今回の模試で最も難易度が高い問題であった。同じくらい難易度が高いワースト5の、エジプト＝トルコ戦争でロシアがエジプトを支援していないことを答える問6も、正答率27.3%と低かった。正答率20.7%でワースト3の、フィリップ2世とアンリ4世が行ったことを問う問7は、問題形式の難しさもあるが、フランス史の基本であり残念な結果といわざるを得ない。ワースト4の正答率23.9%の問4では、ノヴゴロド国を建てたりューリクが、キエフ公国を建国したと間違えた生徒が多かったようだ。東南アジアの古代史の問題（問1）の正答率が、59.3%と高いのは意外な結果であった。ササン朝に関する問2も正答率52.4%という良い結果であった。ラーマ5世の即位の時期を問う正答率35.7%の問3は、タイの近代化が日本と同時期ということ覚えていれば解ける問題であった。ピョートル1世の事績を問う正答率43.0%の問5とマリア＝テレジアの事績を問う正答率36.0%の問8はともにロシア史とオーストリア史の基本なので残念な結果といえる。

### 第2問 世界史上の都市

世界史に登場する都市の位置を確認しよう。

第2問の得点率は47.8%と大問の中で最も高かった。この理由は、最初に述べた正答率79.8%のケネディ大統領を問う問9があったことが大きいと思われる。また正答率60.2%のデリー＝スルタン朝のアイバクを問う問5、正答率56.1%の洛陽と南京の組合せを問う問1はちょうど学習したばかりの内容と考えると納得がいく。逆に、第2問最低の正答率29.5%の、第一次世界大戦後のアメリカ

合衆国について問う問8は未習分野であるためだろう。長安の位置を問う地図問題の問2は、正答率40.2%と健闘している。長安・洛陽・開封・臨安(杭州)・北京・南京等、重要な中国の都市についてはその位置を確認しておこう。インド・ヨーロッパの都市の位置も毎年のように出題されるので押さえておこう。正答率49.5%の問3の唐の問題は、既習事項と考えるともう少しできてほしかったところ。正答率41.3%のインド仏教史の問4も同様である。逆に、正答率39.4%のボンベイについての問6、正答率42.6%のカナダの問題(問7)は、近現代史の問題にもかかわらず善戦した。

### 第3問 民衆による異議申し立て

**正文選択, 誤文選択, ab正誤組合せ等出題形式を把握しよう。**

この大問の得点率は平均的なものだった。全体ベスト2の、正答率77.2%の日本の米騒動を問う問4は大健闘であった。逆にワースト1であった正答率19.7%の第二次世界大戦後の出来事を問う問7は、フルシチョフとゴルバチョフを取り違えた生徒が多かったようだ。今回、フランスに関する選択肢がいくつか出たが、結果はあまり良いものではなかった。正答率43.3%のワット=タイラーの乱と百年戦争についての問1は健闘した。正答率31.0%の紅巾の乱についての問2は、時期指定問題とはいえ、既習内容と考えると残念な結果であった。逆に近現代史である、ロンドンについての正答率39.9%の問3とアメリカ移民についての正答率42.8%の問5は、未習内容と考えると一定の評価はできる。マラッカ王国と義和団事件を問う正答率43.5%の問6も同様である。正答率40.4%の問8はヤゲウォ朝を思い出せるかが鍵だった。毛沢東とニクソンについて問う問9は正答率38.3%であった。現代史で未習と思われるが、頻出の人物なので、今後注目してほしい。

### 第4問 世界史上の海上交易

**アフリカ史・中南米史・オセアニア史にも注意しよう。**

ほとんどの内容が既習と考えると、この大問の得点率が42.6%というのは低い結果といえる。比較的できているクリュニー修道院を問う正答率48.9%の問3、ムガル帝国について問う問6(48.1%)は、

ともに正文選択の問題であったが、誤文が基本的な間違いなので、比較的簡単な問題であった。比較的できていなかった、マリ王国について問う正答率35.3%の問5は、アフリカ史という弱点分野であるためだろう。解答解説の整理を参考にして、資料集などで確認しておこう。中南米史、オセアニア史も同様である。アステカ王国とその位置を問う、正答率44.2%の問9のような出題がありうる。

正答率37.3%の、ファーティマ朝を問う問1のような問題を解くためには、イスラーム王朝を整理しておくとうい。東ローマ帝国の公用語を問う正答率39.0%の問2であるが、帝国のギリシア化の時期を把握しているかが鍵となった。鄭和とマルコ=ポーロを問う問4は43.0%であった。元をマルコ=ポーロが訪問することは、世界の一体化という頻出テーマと関わるため重要である。黒人奴隷問題に関する、正答率37.9%の問7では、ハイチがフランス領だと判定できるかが問われた。中世ヨーロッパの商業的中心の一つであるフランドル地方を問う問8は、正答率47.1%とまずまずの出来であった。

## Ⅲ. 学習アドバイス

### ◆基本を確実に身につけよう。

センター試験では様々なテーマのリード文にもとづいて設問が出されるが、各小問は教科書レベルの基礎的知識で十分に対応できるので、幅広い基礎力の養成がポイントとなる。その際に資料集などの地図や図版を合わせて参照し、立体的な学習に努めることを必ず実践してほしい。世界史は現代の世界に直結している。毎日のニュースに関心を持って見聞きしよう。

### ◆現時点の学力を正確に把握しよう。

どのような模試であれ、模試は受けた後の活用が大切である。模試の結果を分析して現時点での学力を正確に判断し、これからの学習計画にそれを反映させ、効果的な学習に努めよう。